

言語教育における SNS¹機能の活用について

—クラス運営の一環としての試み—

李秀旻

目 次

1. はじめに
2. 1. 言語教育に SNS を活用した事例と先行研究
2. 2. クラス運営のための SNS
3. 1. 授業運営にあたって
3. 2. 活用内容
4. むすび

キーワード：韓国語教育, 言語教育と SNS, ライン, クラス運営

1. はじめに

現在、インターネットの拡散やその技術の発展とともに個人用コンピューター(以下「パソコン」)普及率も増加し、さらにはスマートデバイスやその一種であるスマートフォン²も急速に普及している。総務省の平成 30 年 10 月末確定値によると、スマートフォンの普及率は 13～49 歳帯は 80%を超えている。

このような現状の中、インターネットに関連する技術を教育に活用しようとする試みも続けられてきた。言語教育でも CALL(Computer-assisted Language Learning)に関する継続した努力が多様な形で成果をあげてきた。

ところで、今や大学生となると、ほぼ 100%と言っても過言ではないくらいスマートフ

¹2020 年総務省ホームページによると、「SNS は、ソーシャルネットワーキングサービス(Social Networking Service)の略で、登録された利用者同士が交流できる Web の会員制サービスのことです。」とされている。なお、SNS の主な種類については総務省サイトを参照されたい。
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd142210.html><https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd142210.html>

²IT 用語 e-Words では「スマートフォンとは、個人用の携帯コンピューターの機能を併せ持った携帯電話。従来の携帯情報端末に携帯電話・通信機能を統合したものと表現されることもある。単に高機能というだけでなく、汎用の OS を搭載し、利用者が後からソフトウェアなどを追加できるようになっている機種を指す場合が多い。」と明記しているが、他に明確な定義した資料は見当たらなかった。

オン（以下「スマホ」）を所有し、常に携帯している。

第2言語としての朝鮮語教育の現場でも時代の変化は感じ取れる。数年前までは教材に付いている音源のCDを取り込んだパソコンを活用していたが、最近の学生の多くは外付け用のノートパソコンを所有していたり、またCDが使えるパソコンでも取り込み方法が分からないこともあり、課題など必要な時のみ再生していることが多い。つまり、CDからパソコンに取り込めば、あとは自分の携帯に同期して、パソコンのない時でも音源を聞くことができた。しかし、それがスムーズにできなくなった今はCDの音源を携帯した状態で活用することがむずかしい。この問題に対応すべく、語学教材を提供する側も出版社によっては徐々にQRコードからスマートモバイルに音源を取り入れるようにするなどの対策を始めている。

このような変化の流れから、より効率の良い学習方法や授業運営を模索している中、ひとつの試みとして、本学³学習者にとって最も身近であるスマホのSNSアプリをクラス運営に取り入れてみた。本稿ではその内容の中間報告として、現段階における具体的な内容について述べる。

2.1. 言語教育にSNSを活用した事例と先行研究

まず、日本語学習のためにSNSを活用した先行研究は、学習者と教員だけがSNSの構成員として言語学習を試みた内容が多い。奈須(2018)は韓国の日本語学習者を対象に、Facebookでグループを作って学習効果を調べた。斎藤(2014)は日本の留学生を対象に学内のSNSを利用し、岩崎(2016)も日本語の作文授業を教育用SNSを使って行い、報告した。一方、阿倍(2010)は、中国の大学で日本語学習者のためにSNSを使いながら、日本人(厳密に言えば「日本語母語話者」)協力者を参加させた。希望者に限って参加する形であり、外部からの希望者が参加した可能性もある。斎藤(2014)は、「閉じられた参加者だけでグループを構成した理由として、安全性の確保やコミュニティメンバー間の活動であるという安心感を与えるためだ」と指摘したが、高橋(2014a)(2014b)で述べたような、「Facebookで世界中の学習者に日本語使用の機会を提供することを目的としている」に似たようなグループが近年増えているのも事実である。とりわけ、Facebookはいろいろな目的のグループ

³関西学院大学

があり、朝鮮語関係のグループも筆者は多数確認した。公開グループではあるが、書き込みなどをする場合は友達申請をして承諾があれば、簡単に参加できる。非公開グループまで入れると、言語学習に関するグループは数え切れない数が存在すると推測される。

日本の研究はパソコンを意識したFacebookや学内及び教育用SNSを使って行われたものが多いが、韓国ではモバイル機器、特にスマホのアプリケーションを利用した試みが多い。

정동빈(2011)は同じ語彙の学習効果のカカオトークとネイトオンというプログラムを使って比較した結果、カカオトークを利用したグループがより効果をあげたことを確認した。また、원은석・신수정(2013)では、「カカオトークの長所とも言える機能がソーシャルネットワークの役割を超え、新しい時代が必要とする言語教育の手段として注目が集まり、その効果に関する研究が活発に行われてきた」としている。송은혜(2016)、Kim & Yoon(2012, 2013, 2014)はカカオトークを使って、英語の語彙習得、発音練習、書き能力、意思疎通能力などに非常に肯定的な影響を与えていることを証明する研究を多数発表した。他にも김혜경(2016)、Gillies(2016)、Johnson(2009)、Slavin(2011)でも「カカオトークを利用した言語学習を通じて、少集団中心の協同学習(cooperative learning)を経験した学生がより高い学習到達に至り、自信感を持ち、高い学習満足度を感じるようになることで、社会化に必要な技術を上手く学習できるようになる」ことで共通の見解を見せた。

日本でもスマホを使用して学習効果を測った試みもある。岩居他(2018)では「複言語学習のすすめ」の一環として、ドイツ語、インドネシア語、韓国語の3つの言語を、15回の授業で一つの言語を5回ずつ学ぶシステムになっている状況の下、スマホの動画機能を利用して自己紹介などを行い、学習効果を測定した。

さらに、スマホ登場以前でもすでに、フィーチャー・フォン(通称ガラパゴス携帯:ガラケー)を用いた実験が行われていた。Thornton・Houser(2005)は、日本のある大学で行った実験から、携帯電話とWebをから提供した英語の語彙学習の場合、Webより携帯電話の方が効果的であることを発見した。「学生側はメッセージ機能を活用した学習方法を好む」ことを立証した。

2.2. クラス運営のための SNS

以下、2016～2019 年本学⁴の学部開設科目において、筆者の担当した朝鮮語授業でスマホのアプリケーションを活用した経緯や方法について述べよう。

近年、とりわけ若い世代においてスマホ使用は、日常生活の一部と言っても過言ではないほど彼らの生活に密着している。総務省の調査⁵でもこの 10 年あまりの間、急速に普及していることが明らかになっている(統計は総務省のサイトを参照)。今後はさらに高速通信の発達や AI(人工知能)の開発によって、より利便性が高くなり、さまざまな機能が搭載されるだろう。一方、言語学習には読む・書く・話す・聴くの 4 つの機能を同時に習得することが必要不可欠であることから、講義中心の科目とは異なる授業運営が要求される。さらに、反復学習の重要性、ことばが背負っている文化的背景など、学習者側の興味を引き出すことの必要性とともに、教える側が与えるべき情報量も多い。目まぐるしい変化の流れからすると、着実に文法を積み上げて他言語の文献を読んで情報を取り入れるといった学習方法は、高度な知識を必要とする一部の学習者にとっては大事なことだが、多くのいわゆる「第 2 言語」として提供する言語学習に対しては、目標言語のコミュニケーション能力や異文化への理解に主な力を注いでいる現状がある。日常において韓国語にあまり接することのない日本の大学で、授業の時間だけでできることは限られているということは周知のことだろう。そこで、より効率をもとめた結果として SNS が浮かび上がった。しかし、先行研究を見渡す限り、日本では Facebook か学内のアプリケーションを活用した事例がほとんどであった。韓国ではカカオトーク⁶と呼ばれる「グローバルモバイルインスタントメッセージ」を使って学習効果などを測ることを試みる研究が多かった。日本ではカカオトークのようなスマホのアプリケーションとしては「ライン(LINE)」というものがある。総務省の調べでもこの SNS の利用率が一番高い。もちろん、学生のスマホに関し

4 関西学院大学

5 「最初にスマートフォンに着目する理由としてインターネット上の行為は、オンラインプラットフォームやポータルサイトを經由するとともに、様々な無料・有料のサービス利用時に登録を伴い、身近なインターネット接続機器であるスマートフォンからは、膨大なデータが生成されることが挙げられる。スマートフォンの普及状況は、どのようなものだろうか。2017 年に入り、全世界での利用台数は 40 億に達していると推計されている。スマートフォンは、地域・世代・収入等による差異はあるものの、今や世界中でインターネット接続に最も使われている機器といえる。ただし、スマートフォンがそのような位置付けとなったのはごく最近のことだ。代表的な機器に挙げられる iPhone が初めて米国で発売されたのは 2007 年のことで、わずかに 10 年前のことである。」総務省サイト「スマートフォン経済の現在と未来」
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc110000.html>

⁶ <https://www.kakaocorp.com/service/KakaoTalk?lang=en>

でも筆者の経験から 100%このラインアプリケーションを使用していた。

このような流れから「ライン」を学部開設の朝鮮語授業に取り入れて活用する試みが始まった。

3.1. 授業運営にあたって

筆者は 2016 年～2019 年の間、2016 年度は前期・後期とも 11 コマ(1 コマ 90 分)を担当したが、2017 年度からは毎学期 10 コマを担当した。学生の延人数をざっと合わせると 30 人規模×10 クラス×4 年であり、およそ 1200 人であるが、中には 10 人台のクラスが毎年 1 クラスほどあったので、およそ今まで 40 クラス、1000 人ほどを担当したことになる。正確な人数は遑って調べられるものの、人数にさほど差はなく、それくらいの人差なら正確な数字はあまり意味を持たないと判断される。さて、担当した 41 クラスだが、全てラインのグループを作って授業運営を試みた。

まず、新しいクラスを担当する際、授業始めのオリエンテーションと 2 回目の授業では以下のことを行なった。

①クラス全員がスマホを持っているか確認し(担当した全員がスマホの所持者だった。)、ラインを日常で主に使用しているかを確認した。

②初回の授業では授業運営の円滑さや効率、情報の共有など、グループ作成のメリットや注意事項を説明した後、教員(筆者)を含めたクラス全員がグループに参加する意思があるかどうかを尋ね、次回の授業まで考えてみる時間を与えた。

③2 回目の授業では、あくまでも自由参加であり、強制ではないことをもう一度喚起する。そしてすでにグループに参加することに全員の意見が一致している場合はその場でグループを作った。まだ意見がまとまっていない⁷クラスの場合は匿名で賛否を書いてもらい、意見をまとめた。4 年間全てのクラスにおいて一人⁸の学生と、最初から最後まで欠席した何人かの学生以外、全員がグループに参加した。

④グループ参加時の注意点は以下のようである。

- ・グループの人数が多いこと、載せる内容の多くは授業中すでに知らせていること

⁷ 朝鮮語Ⅱ以降のクラスでもクラスの統合などでお互い知らない人が多く、一週間の間意見を話し合う機会がない場合や、新入生の場合が多い。

⁸ 参加しない理由ははっきりしていなかったが、その学生には不利益を被らないように、パソコンアドレスにラインで共有した必要な資料は全て送っている。

から、緊急を要する内容は（普通に授業に参加していれば）ないため、書き込みを知らせる機能である「通知」の音はオフにすること。1 日一度は見るラインだからこそ、音で知らせなくても、知らせがあると自然に表示されるので、文字表示機能はそのままにして、特に何も無いような時も毎日何らかの書き込みが届いているかだけはチェックすることを勧めた。これは教員側の書き込みや夜中の音源作成、24 時間いつでも構成員同士でやりとりをすることも多いためである。他には以下の決まりがある。

- ・一般的な SNS 扱いに関する常識に基づいて投稿したり、議論すること。
- ・そのクラス以外の外部者は招待しないようにすること。
- ・グループを作ってもそのまま個人の友達になる機能はなるべくオフにすること。

これはグループに参加することで、必然的に構成員同士が当該 SNS 上で個人的な友達としてつながることを防ぐためである。SNS での個人的なつながりはやはりプライベートなことで、個人の意思に関わる。筆者もグループ全員と個人的つながりを防ぐため、グループのつながりが個人のつながりになる機能はオフにしている。このような機能は SNS によって異なる。

⑤グループを作った後の使い方など

・ノート機能の活用：ラインの機能⁹には色々あるが、「ノート」機能を活用するため、「記録係」を担当する学生を 1-2 人選んでもらう。1 人の場合が多かったが、記録係が欠席などでできなかつたり、より正確な内容を伝えるために 2 人で担当する場合もある。記録係も教員が選ぶのではなく、志願や推薦で選ばれる場合など、授業構成員（以下「学生」）自ら選ぶことにする。

・ハングルのキーボードが使えるように設定：スマホの種類によってキーボードを簡単に追加できるものもあれば、新たにダウンロードしないとイケない場合もあったが、年々日本語や英語以外の言語を追加する機能が進んで、その場で簡単にできるようになった。ハングルの場合は 3 つほどのキーボードの形があるが、パソコンと一番似ている「標準」タイプに統一して、文字列に慣れることによってパソコンでもハングルが使えるようにした。

- ・グループの名前は当該年度、学部、授業曜日が分かるように筆者が 10 クラス全て

⁹ <https://line.me/ja/>

統一して入力した。例えば、火曜 2 時限にある 2019 年度経済学部Ⅲの 1 クラスなら、「19 春火 2_経Ⅲ1」のようにどのクラスかがすぐ分かるように記入した（毎年若干異なる）。

・他にも「投票」機能を使って試験日の調整や課題内容の選択などを学生自ら決めるようにした。また、「ボイスメッセージ」機能を使って音源資料を送ったり、「アルバム」機能には資料写真を載せる。また、ワードやエクセルで作った資料も添付できるので、携帯で「いつでも」「どこでも」授業内容を確認し、学習できるようにした。

・「ボイスメッセージ」に送られた音源や授業内容に関わる動画の情報を授業中確認することも多く、そのために全員がイヤフォンを必ず携帯するようにした。

3.2. 活用内容

担当した授業は朝鮮語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳで、それぞれのレベルが週 2 回（文法 1 回、会話 1 回）の授業となっている。文法と会話は担当者も異なり、教材や成績評価も異なるので、ペアの授業であっても共通シラバスで、授業運営は独立している。ただ、教材については学部開設科目は文法教材と会話教材の 2 種類と決まっており、すべてのレベルで同じ教材を使用している。文法教材は CD が 1 枚あるが、他の多くの教材と同様、本文をメインに作られたものである。教材の中身に比べて音源の量は圧倒的に少ない。会話の教材も CD 1 枚が付いており、文法教材より聞き取りや会話練習の音源は入ってはいるが、内容の半分以下の音源しかない。特徴と言えば、本文の内容を直接再現（演技）して YouTube に載せ、教材にある QR コードから読み取ることができることである。

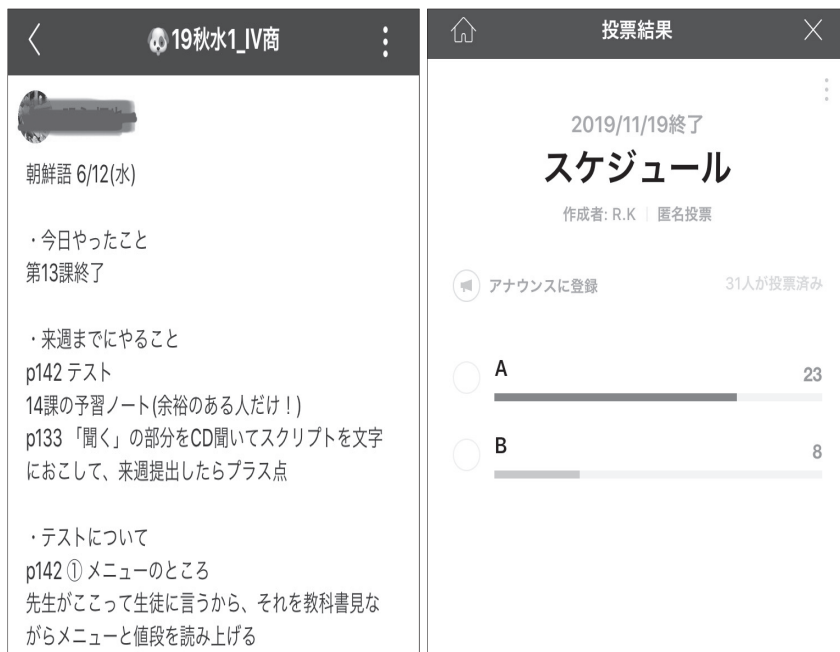
このような条件の下、最初は授業連絡やその日の授業で何をやったのか、課題は何か、テストの予定のリマインドなどにライングループを活用していた。教員側としても伝えるべきことの確認や自分自身のメモ代わりにもなった。しかし、せっかくグループを作ったからには学生にもっと役に立つものにした方が良くと思うようになったことに加え、何より、学生側がライングループを思った以上に見ていて、質問などもグループに書き込み、お互い答えを教え合ったり、資料を共有する場面が多いという結果になった。以下は徐々にライン機能を実験しながら定着させたグループ運営の主な内容である。

①記録係の役割及び、ノート機能・投票機能

記録係は、授業内容や課題、今後の予定など、その日に行った内容を簡単にまとめて載せる。

同じ大学であっても、クラスによって学習能力やモチベーションの強弱は異なるので、運営方法も多少の差が生じる。つまり、共通テストのない語学科目は、全てのクラスを同時にテストすることはできない。また、クラスによって能力の差がある(とりわけ、再履修クラス)以上、各クラス課題の量やテストの量、中身も異なってくる。ここで、10 クラスを全て管理する立場としては、クラス構成員である学生が多くのことを自主的に決めて、決めたことをちゃんとやってもらうのが理想である。例えば、月の初めや連休の前など、約 1 ヶ月の暫定予定を立てる際¹⁰、教員側の希望を一方向的に押し付けるのではなく、先に教員側の希望を伝えてから、学生側の希望や案を聞いて、いくつかの候補を作成し、ラインの投票機能を使って匿名で投票する。その結果については特別なことがない限り、学生自ら選択した内容であるため、そのまま記録されるし、行われる。また、投票機能を使って投票場箱を作ることから結果を書き込むまで学生が行うようにしている。この投票機能は慣れてくると、学生同士の意見の違いなど、他のことを決める時も頻繁に使われていて、民主的な共同作業が行われる場面を多々見てきた。さて、記録係はその日のうち記録をするが、足りないところは教員が補ったり、授業中言い忘れたことなども付け加えるので、次の授業までにやるべきことがいつでもリマインドできる。以下は、以上の内容に関連する画像の例である。(この画像の「CD」は音源を指す)

〈例 1〉



¹⁰ シラバスは本来、そのクラスの担当者が作成するものだが、本学はコーディネーターが一括して作成しているため、シラバスとおり進めるには限界を感じた。

②ボイスメッセージ機能と添付ファイル機能の活用

語学学習において最も大事な項目は学習者が新しい音に慣れることで、「聴く」トレーニングは、学習者自らの自主的な反復学習が最も要求される。上でも記したように、目標言語を使う専門家を目指すような一部の人以上はコミュニケーションに目標をおいて大学の第 2 言語として学ぶ。しかし、本学のように週 2 回 4 セメスターの授業となると、「少し他の言語を味わってみた」くらいでは単位の比重も費やす時間も重い。つまり、ある程度のレベルの能力を備えられるような授業を提供しなければならないし、共通シラバスでも何をどこまで学ぶかを明記しているが到底できるものではない。ともかく、そのためには「読み・書き・聴き・話し」の 4 つの機能を偏りなく身につける必要性が重要な課題となる。文法を覚える、文字を書く作業は学生にとって比較的慣れているが、聴くことや話すことには興味は示すものの、いざ練習を始めるとなかなか慣れるのに時間がかかる。高校まで言語学習の方法を教わっていない、もしくは受験のため余裕がなかった、という印象が見受けられる。そこで、学生に馴染ませる作業の一環としてラインのボイスメッセージ機能を活用してみた。

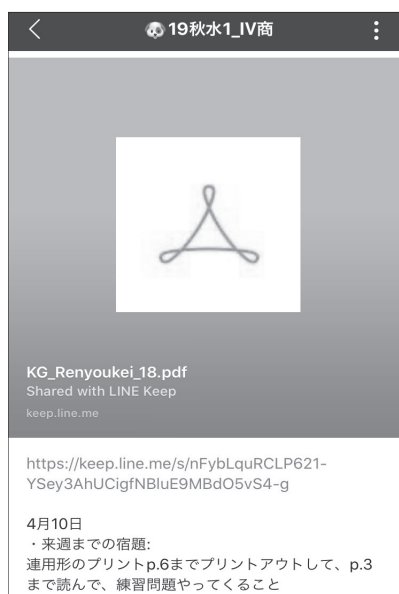
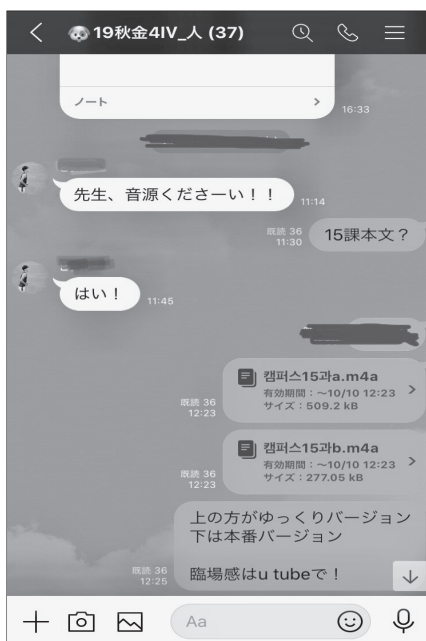
入門段階から教材 CD の音源の有無¹¹はさておき、授業で習った文字や語彙の音源をボイスメッセージに録音¹²して送り、書き取りテストを繰り返すことによって、常に「音」を意識するようになった。そして、レベルが上がって文章の暗唱や読み課題・テストを行う際も「ゆっくりバージョン」と「早いスピードバージョン」を用意し、ラインで共有した。もちろん、本文などは教科書の CD に収録されており、CD の内容を携帯に取り込むようにはしているが、「スピードが早いのでゆっくりバージョンがほしい」というリクエストが多く、レベルが上がっても教科書の CD だけに頼ることはできないのが現状であることも実感した。そのうち、音源の共有を筆者が忘れても学生から「音源がほしい」と、すぐ書き込みがある。Ⅰ～Ⅳの、文法か会話全部のクラスをたまたま筆者が担当したクラスは明らかに音に対する抵抗もなく、聞き取りや話すテストでもⅢから担当したクラスに比べると、教科書の聞き取り問題を応用したのも「難しい」という話はあまり耳にしない。また、発音においても滑らかさを感じる。これについては、今後の課題としてボイスメッセージを全く使わないクラスと今までのように活用したクラスの学習到達度について実験・分析する予定である。今回はあくまでも 20 年以上多くの大学で教えた経験から、今回の試みで伝わったことを仮説として書き留めておく。ボイスメッセージの効果は明らかにあると確信している。

¹¹ CD の音源は自分で調べて携帯に取り込むようにしているが、学生の半分くらいしかできないのが現状である。

¹² 筆者の場合、ネイティブの教員であるため音源作成がやりやすかった。最初に「アナウンサーの訓練を受けたこともない普通のネイティブの発音」であることを学生にことわっておく。しかし、本学の朝鮮語Ⅳぐらいなら、非ネイティブ教員も充分音源は提供できるレベルである。

次に、添付ファイルの機能がある。ボイスメッセージと同様、保存期限はあるものの、二つともラインキープという保存できる場所があるので、保存ができるし、添付ファイルの場合、ワードやエクセル、PDF ファイルはノートに貼り付けるかリンクを共有すれば、それをラインキープに保存すると、期限を意識しなくてもいい。ワードで作成した課題などは添付ファイルで共有すると、各自パソコンでも携帯でも自分好みのサイズやフォントに変えることもできる。共有するものは筆者が作成したもので、プリントで配っても中身は同じである。つまり、著作権云々とまで広がる内容でもない。このようにファイルを携帯に添付して送り、プリントアウトは各自行って持ってくるシステムになる。また、プリントを忘れてもいくらでもプリントアウトが可能になるし、携帯を開くと、いつでもどこでも見て聴く学習をすることができる。仮にプリントも携帯も忘れて登校しても友達の携帯からまたプリントアウトできるので、学生側からすれば「逃げ道がない」。

〈例2〉はボイスメッセージと添付ファイルの画像である。



他にも、教材に出ている韓国文化に関するイラストが二色刷りのため、見にくかったり、実物を見せた方が印象に残るようなものは実物が載っているネットのアドレスを共有し、授業時間内外で見せ、名前などはボイスメッセージで送る。音韻変化を学んだ時は当該音韻変化が多数使われた歌などを YOU Tube から共有し、音を忘れないように工夫する。また、ハングルが読めるようになったら、自分の名前の綴りを添削し、ハングルのキーボードで名前を送るようにして、キーボードに慣れる機会を増やしていく。韓国に関するもので興味を引き立てるような

内容があればネットを共有する。他にも内容によっては授業時間に使用することも多い。同じ漢字圏の言語であることから、辞書のアプリケーションやサイトを入れるようにして、漢字の確認（韓国は旧漢字体）をさせたり、疑問に思うことは時間を決めて調べるようにしている。ハングル能力検定試験や韓国語能力検定試験のお知らせなどの情報共有に関しても、授業中話し忘れたものが携帯に入ると嫌でも目に入り、韓国語に接する時間も増える。

このように、小型パソコンのような役割をしているスマホは、少なくとも筆者のクラスでは有効に使われている。

4. むすび

当初、同じ言語の教員から、ラインを授業で使うことは「学生と親密な関係なる」という理由で反対された。しかし、学生と親密な関係になることとクラス運営に関することがどうしても結びつかず、筆者の計画どおり実行してきた。

結果、上記のように否定的な問題はほとんど起きず、肯定的な結果が多かったことは、それなりの成果があったと思われる¹³。

ラインのような機能を持つアプリケーションは、上で述べた、スマホが持つ接近性、移動性、即効性に加え、使い手の間で親密な総合作用を可能にする長所や、情報を伝えたり、確認できる利便性も備えている。このような長所を生かされると、単なる SNS の役割を超えて、新しい時代が必要とする言語教育の手段として役割を果たすことと期待される。

参考文献

<論文>

奈須吉彦(2014)「情報共有を目的とした SNS への課題投稿の試み-Facebook グループを利用した教室外活動の実践-」『日語日文学』62 大韓日語日文学会 pp. 101-118.

木くるみ(2010)「関西外大-バックネル大学 Facebook プロジェクト 2009:Facebook を使った実践的コミュニケーションの試み」『研究論集』92 関西外国語大学 pp. 171-184.

阿部啓子(2010)「SNS(Social Networking Service)を使用した日本人との交流活動の試み-中国における日本語学習者を対象として-」『日本語教育方法研究会誌』17-1 日本語教育方法研究会 pp. 14-15

岩崎浩与司(2016)「教育用 SNS 「Edmodo」を使った文章表現活動」『日本語教育方法研究会誌』23-1 日本語教育方法研究会 pp. 52-53

¹³ 1 セメスターで2クラスをぬきうちでアンケートした結果(500人強)、98%が「使って良かった」、1%は「分からない」1%は「無応答」であった。アンケートの内容については次の機会に詳しく報告しよう。

- 齋藤智美・渡部みなほ・田所直子・川名恭子・田中敦子(2014) 「総合的言語活動としての「日本語かきこ」-振り返り アンケート調査からみる学習者の評価-」『早稲田日本語教育実践研究』第 2 号 早稲田大学日本語教育センター pp. 45-64
- 高橋敦(2014a) 「グローバル・ネットワーク時代における「新しい日本語学習者」とオンラインコミュニティへの受容」『桜美林 言語 教育論叢』10 桜美林大学 pp. 139-156
- (2014b) 「社会的視点から見た第二言語習得におけるオンラインコミュニティの可能性と管理者の役割—Facebook を用いた実践から—」『言語教育研究』5pp. 41-58.
- 김지영(2006) “모바일 기반 언어학습에 관한 고찰” ·현대영어교육 7 (2), pp. 57-69.
- 장은지·원은석·정동빈(2011) “스마트폰을 활용한 어휘추론전략 학습의 효과” 『현대영어교육』 12 (3), pp. 342-367.
- 한지희·임희정(2011) “디지털 영어교재 기반의 블렌디드 러닝이 초등학생의 읽기 성취도와 자기주도적 학습능력에 미치는 영향” 현대영어교육 · 12 (3), pp.384-405.
- 정희정(2012) “유비쿼터스 학습환경과 학습매체 특성이 영어학습자의 지각된 상호작용성과 학습 성과에 미치는 영향” 『영어교육연구』 24 (1), pp. 235-254.
- 권연희(2013) “스마트 어플리케이션을 활용한 대학생 영어 학습 사례 연구” ·멀티미디어 언어교육 16(1), pp. 37-65.
- 원은석·신수정(2013) “대학생 휴대 단말기 사용현황 조사를 통한 스마트러닝 영어교육 발전방향 제시” 영어영문학 18 (2) pp. 225-249.
- 조연정·강정환(2015) 『카카오톡은 어떻게 공동체가 되었는가?』. 서울: 다산출판사.
- 송은혜(2017) “스마트폰의 카카오톡 문자 채팅을 이용한 영어연습이 EFL 대학생들의 영어 말하기에 미치는 영향 연구” 『외국학 연구』 41, pp. 41-63.
- (2016) “스마트폰 듣기앱과 카카오톡을 활용한 영어듣기 연습에 관한 연구” 멀티미디어언어교육 · 19 (3) pp. 83-109.
- 임화섭(2017) “스마트폰 사용자, 이용시간 88%를 모바일 앱에 써” ·한국경제 · (10 월 2 일). news.hankyung.com/article/201710024830Y
- Kim, H. and Yoon, M. 2014. Adopting Smartphone-based blended learning: An experimental study of the implementation of Kakao Talk and Mocafe. Multimedia-Assisted Language Learning 17 (2), pp.86-111.
- Thornton, P. and C. Houser. 2005. Using mobile phones in English education in Japan. Journal of Computer Assisted Learning 21 (3), pp. 217-228.

<サイト>

総務省：<https://www.stat.go.jp/dstart/>

IT用語辞典 e-words <http://e-words.jp/w/スマートフォン.htm>

ライン：<https://line.me/ja/>

カカオトーク：<http://www.kakaocorp.com/service/KakaoTalk?lang=ko>